VOL.127
発行/2004年
9月1日

アルパック ニュースレター

ISSN 0918-1954

元禄の酒都「伊丹」の築330年の酒蔵（本文中に関連記事があります）

目次 contents

・市民が広報する都市計画マスタープラン …… 2
・六甲山のこれからの100年行動計画 …… 3
・元禄の酒都「伊丹」五感で楽しむ …… 4
・みんなのために …… 6
・京都造形芸術大学とマサチューセッツ工科大学合同の
　姉小路ワークショップの取組報告 …… 7
・「リターナブルびん」の利用促進について …… 8
・メディア・ウォッチ …… 9
・まちかど …… 10

市民が広報する都市計画マスタープラン

〔大阪事務所／坂井　信行〕

ひと・まち・地域

行政計画を市民が広報する

このたび吹田市都市計画マスタープランが策定されました。検討にあたっては、市民会議をはじめ市民参加のプロセスが重視されました（市民会議については本誌第106号で、取り組み全体の概要については、弊社webページ（http://arpak.co.jp/hyogo/08.htm）でご紹介しています）。時間をかけて丁寧に作り上げていったことから、検討に参加した市民と市の担当者にとって共に思い入れの深いものになったのではないでしょうか。計画内容の検討が一段落ついた頃、参加者の市民からマスタープランを紹介するリーフレットを自分たちでつくりたいという意向が示され、市はそれを受け入れました。この間の取り組みの中で市民との間に一定の信頼関係ができていたからです。

こうして有志の市民を中心とする編集会議が組織され、市民による広報リーフレットづくりが始まりました。行政計画の広報リーフレットを市民が作るというのはあまり例のないことではないでしょうか。

市民にとってのマスタープランとは？

マスタープランの本編と概要版は市によって用意されることから、単にマスタープランの内容を紹介するだけではない、ひと味違った何かが求められました。まずは、市民の立場でマスタープランを捉え直し、市民にとってのマスタープランがもつ意味を考えることから始めました。「自分たちがまちづくりに取り組む時、はじめの一歩をどのように踏み出せばよいのか、マスタープランがそのきっかけになるのではないか。」そこでリーフレットにまちづくりマニュアル的な性格を持たせることにしました。自分たちのまちに興味を持ち、まちの将来のことを考えたいと思った時、マスタープランとどのように関わっていくことができるのか、市民の立場から提案することになりました。

リーフレットはA2サイズをA4版に折り畳んだ形態で、次のような構成になっています。

表紙：タイトルは「まちづくりガイド＆マップ」と名付けられました。

見開き：策定の経緯と、地域でのまちづくりの進め方やマスタープランとの関わり方が解説されています。

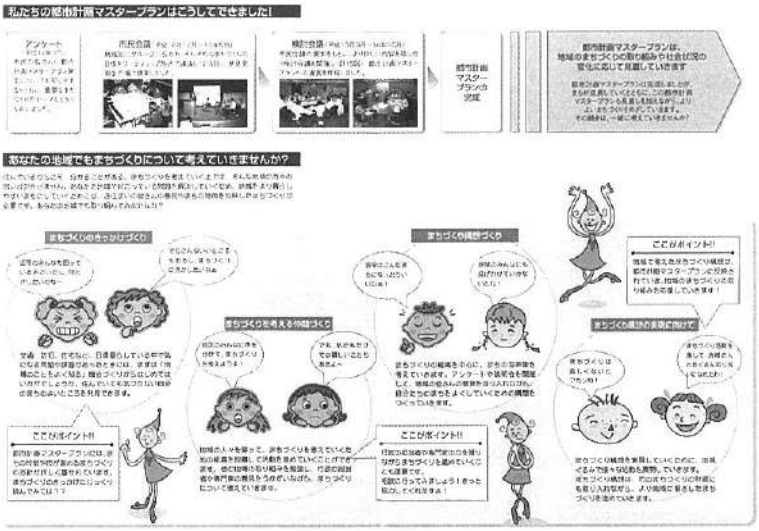
中面：地域別構想の図面を中心に、計画の概要が市民の言葉で紹介されています（下図参照）。

裏表紙：まちづくりに関連する市の計画やパンフレットが紹介されています。

協働のまちづくりに向けて

都市計画マスタープランづくりの一連の取り組みを通して、市民はもちろん、市の担当者も市民と行政が協働で進めるまちづくりに確実な手応えを感じたのではないかと思います。実際、市内のいくつかの地区で市民の主体的なまちづくりの取り組みが活発化し、マスタープランを主管する都市整備室は市民参加に関して庁内をリードしているということです。

今回の取り組みの全ては「市民参加の記録」という分厚い冊子に取りまとめられました。振り返ってみると不十分な点も思い当たります。市民会議の参加者が回を重ねるごとに少なくなっていったこと、マスタープラン文案の検討に直接関わった人が結果として限られてしまったこと…今回の取り組みにとどまることなく、吹田市の協働のまちづくりが新しいステージへと歩みを進めていくことが期待されます。



六甲山のこれからの100年行動計画

〔大阪事務所／吉田　久視子〕

ひと・まち・地域

六甲山は昔ははげ山だった・・・

六甲山といえば、みどり豊かな都市林というイメージがあります。神戸というまちの骨格をなすみどりとして、またその眺望の良さから国立公園にも指定されています。

しかし、江戸時代から近代にかけて、六甲山は山頂および社寺にのみにみどりを残す一面の“はげ山”でした。

それを、当時の神戸市が先陣をきって植樹をし、みどり豊かな現在の姿へと復活したのです。一昨年が、その緑化100周年にあたる年でした。

みどりの「質」

緑化されて100周年経った六甲山ですが、今後の100年をどう創り出していくか。様々な方向性があるなかで、単なる「緑」からもう一歩すすんだ「みどり」が求められていると言えます。例えば、自然面で言えば、単純に砂防に適した緑であればよかった時代から、多様な生物が生息・生育する森林、四季折々に豊かな彩りを醸し出す森林、人とのつながりの深い文化林など多様な機能をもったみどりを創造していくことが求めらています。そして、その多様な機能をもった「みどり」を守り、育て、あるいは創り出していく主体は誰か？そういうことが問われる時代になっています。

市民が集まって行動計画づくり

世の中の流れはNPM（New Public Management)、PPP(Pubilic Private Partnership)へと変わりつつあります。六甲山という市民にとってのシンボルであり、潤いや安らぎを与えてくれる存在についても、市民が今後どうしていくか、どうしていきたいかを話し合い、自ら実行していくことが求められています。

そのため、昨年度、「六甲山これからの100年市民ワークショップ」が開催されました。今後の100年をどうしていくか、市民が自ら考え、その行動計画をつくろう、という場です。市民は公募により募集されました。コーディネーター・アドバイザーとして学識経験者、専門家の方に入って頂き、また、既存団体から代表で、主婦の方、企業の方、学生といろいろな人が集まりました。そしてその機会づくりは行政である神戸市が行いました。

このワークショップには市民、企業はもちろん、六甲山に関わる様々な行政も枠組みを越えて集まりました。六甲山には、国、県、市という３つの行政組織が関わっています。また、砂防、環境、教育、観光、民政と部局も多岐にわたっています。このワークショップでは、それら行政の組織間・部局間も越えて集まり、市民と一緒に今後の六甲山について話し合いました。

ワークショップは合計５回開催され、行動計画には、六甲山の里山林管理活動、六甲山のCI計画づくり、インタープリテーション活動、森の幼稚園、保養所の活用、エコツーリズムなど自然と共生した利用方法の提案など様々な提案がなされました。

新しい組織形態ープラットフォームー

この行動計画に基づき、平成16年度も「六甲楽学会」が活動を続けています。いわゆる「プラットフォーム」として、誰でも参加でき、六甲山について話し合い、行動計画を実現していく場として月１回開催されています。様々な団体や市民が活動をしている六甲山ですが、今まではそれぞれが個別に活動し、横の連携がとれていない状況でした。プラットフォームはその横の連携を促し、より効果的に六甲山に関わる活動を進めていくという役割もあります。

六甲楽学会については、まだ始まったばかりで資金面、労力面など課題も多くあります。しかし、市民と行政、企業など多様な主体がうまく協働し、ゆるやかなネットワークの中でさまざまなプロジェクトを生み出していける場として今後の活動が期待されています。

とはいえ活動継続の秘訣はやはり参加している人が“楽しいと感じること”です。まずは自分たちが“楽しい”と思えることをしようと、現在は、秋に実施するイベントを企画中です。

神戸市ホームページ：神戸市からのお知らせ
http://kouhou.city.kobe.jp/information/2004/06/20040601cp03.pdf

元禄の酒都「伊丹」　五感で楽しむ

～築330年の「酒蔵」を舞台とした3ヶ月のロングランイベント～

〔大阪事務所／中塚　一〕

清酒発祥の地「伊丹」

清酒発祥の地については、全国で様々な説がありますが、摂津の国「伊丹」においても大阪の大両替商であった鴻池の発祥の地において、「もろはく澄み酒」醸造に成功し、財を成したと記された碑文があります。

時は元禄、「伊丹諸白」といわれた上質の銘酒の産地として栄え、京都や大坂の華やいだ上方文化を背景に、様々な文化人が足を運び、茶道や文芸、能狂言などの芸術文化が伊丹郷町を中心に花開いていました。

築330年の重要文化財の酒蔵

今回、9月11日から約3ヶ月間、当時の豊富な財力を背景に建てられたわが国最古の酒蔵として重要文化財に指定されている「旧岡田家住宅・酒蔵」の築330年を記念したイベントが開催されます。伊丹の酒造業が育んだ文化をあらためて見直すとともに、伊丹の中心市街地（伊丹郷町）に集積している多くの文化施設等を舞台に、様々な団体や人々が連携して当時のにぎわいを再現する「伊丹郷町でしかできない」魅力的で特徴のある催しが展開されます。

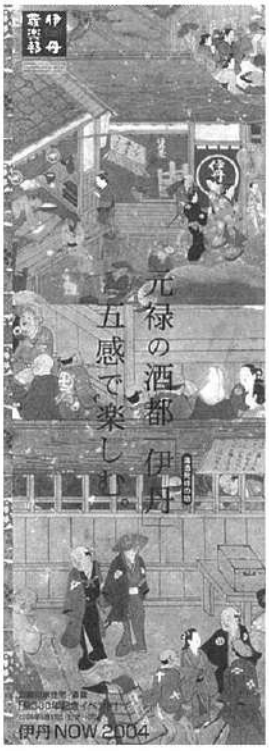
展示会中心から「おもてなし」中心へ

今年の当初にこの企画をお聞きした段階では、美術館や博物館等でのそれぞれの展示会や講演会等を中心としたイベントを行うという話しでした。各イベントは工夫を凝らし又様々な人的ネットワークから著名な方々による講演会等でそれぞれ単体では質の高い内容でしたが、阪神間や全国各地から伊丹の町に来て頂いた人々に対して、昼間の＜講座型イベント＞が中心で、夕方から夜までの＜楽しみ型イベント＞にはなっていない状態でした。

その後、実行委員会を中心として、今回のイベントを「伊丹をアピールするキックオフイベントとして位置づける必要があるのでは。」という話し合いを行いました。その結果、伊丹郷町に拡がるまちなみや町衆の暮らしを基に、来て頂いた方々に「おもてなし」を行い、口コミで「伊丹の良さ」をお土産に持って帰ってもらおうとの話しになりました。

様々な人々の輪の広がり

その後、短期間の間に、伊丹郷町に関わりがある様々な文化、市民、企業団体等（商工会議



所、青年会議所、郷町商業会、酒造組合、茶道協会、いけばな協会などなど多数）との連携や協力のもとに、現在確定しているだけで約40にも及ぶイベントを行うこととなりました。

主なイベントだけでも、「表千家宗匠「久田宗也」茶の湯を語る」や「桂小米朝で笑う」、「伊丹・灘・伏見の蔵元が集う」などの講演会から、「酒蔵で奏でる（テレマン・アンサンブル、伊丹シティフィルハーモニー）」の酒蔵ミニコンサート、「酒と料理と器を食する」や「銘柄ききあてとお酒と料理を楽しむ会」などのグルメイベント、「いたみアート茶席」や「晩秋の風情を楽しむ野点の会」の茶会など、盛り沢山の内容となっています。

（詳しくは、http://hccweb6.bai.ne.jp/kakimori_bunko/330nen_top.html）

現在も、人の輪が広がっており、リーフレット作成後も、伊丹の酒が吉野産の杉で作られた酒樽に詰まれていたご縁で、「吉野山灯り実行委員会（http://www.yoshino.ne.jp/wakwak/yamaakari/yamaakari.htm）」のご協力で酒蔵内で最優秀賞の作品を展示するイベントや各商店街での子どもアートやスタンプラリー等のイベント、地元の人々が太鼓判を押して紹介する飲食店のマップづくり等が展開されています。

都市のイメージ・ブランド戦略

短期間の間にこれ程までの広がりと活動の展開が見られたのは、築330年という酒蔵を代表とする歴史や文化への地域の方々の熱い想いと、今後、伊丹をアピールしていく上でこれら歴史・文化的資源を活用した都市のイメージ戦略、都市のブランド構築による地域価値の創造が重要であるとの共通の認識があったのではないかと考えます。

イベントから伊丹蔵楽部（くらぶ）へ

まだイベントはオープンしたばかりですが、今回の試みが単発のイベントに終わらないように、330年記念イベントを契機として集まった方々により「伊丹を愛し、集い語らい、楽しむ人々の交流」の場として継続した「伊丹蔵楽部」への活動の展開が目指されています。

イベント期間中は、「伊丹蔵楽部」のはっぴを着られた地元の方々が皆さんをおもてなしされます。是非、伊丹まで足をお運び下さい。

■問い合わせ先

主　催：旧岡田家住宅・酒蔵築330年記念事業実行委員会／伊丹市

事務局：(財)柿衛文庫

住　所：兵庫県伊丹市宮ノ前2-5-20

電　話：072-782-0244

みんなのために

〔取締役会長／三輪　泰司〕

6月15日、「高槻市公営企業審議会」が始まり、奥本市長から「諮問」を頂きました。最初は昭和57年で、今回4回目の会長を承っております。

8月11日、「京都のバス事業を考える会」が始まりました。座長を仰せつかりました。桝本市長から「諮問」を頂きました。

中核市・高槻、政令指定都市・京都、規模も性格も違いますが、市民感覚に立ち、地域づくりの視点で、現実を素直に見たいと思っています。

人間の行動は歩行にはじまる

いま、乗合バスだけではなく、タクシーも鉄道も、公共交通事業すべて、その経営環境は、たいそう厳しいです。そこへ需給調整の廃止、つまり規制緩和で、参入が容易になり、競争が激しくなるという新たな課題が出ています。

先ず事実から。肝心の乗客数は、昭和50年頃をピークに減り続けています。公共交通の最も安定した顧客である通勤・通学は、週休2日制、休日増加でガクンと減り、生産年齢人口、即ち就業者の減少はボディブローのようにこたえる構造的な要因です。タクシーの1車平均営業収入はジリジリ下がっています。高年齢就業者層の可処分所得の減少と相関しているのではないでしょうか。

マイカーは自営業など生産手段としての利用は減りませんが、通勤・通学利用は増えていません。自転車は増えています。距離も長くなっています。最も増えているのは実は“歩行”です。時代的潮流－環境・健康・倹約の“3K”が後押ししています。歩行行動圏はますます広がり、中距離二次交通を担う路線バス事業の市場は狭まります。二足歩行は、人間行動の本源です。交通運輸事業の視点では“見えているのに見えない”ことになってしまうのではないでしょうか。

前号で、ソウル特別市の歩行権確保と歩行環境整備基本条例の研究をご紹介しました。世界中で、人間らしい生き方を求めて、猛烈な取り組みが進んでいます。

京都市も基本計画で「歩くまち・京都」を掲げ、TDM(交通需要管理施策)は「歩いて暮らせるまちづくり」と明確なポリシーをもって進めています。

見てないこと、分からないことがいっぱい

都市の公共交通事業はすごいなと感心します。年中無休、朝から夜まで、混み合う道路環境にもめげず、懸命にダイヤを守ろうと走り続ける「路線バス」のすごさ。鉄道の技術力、投資力もすごい。

事業のアイデアやテクニックは、一杯あるでしょう。互いに学び合い、サービスも良くなるでしょう。

規制緩和は、公営交通事業にとっても活動の自由が広がったということです。

そこで次に、“経営の論理”を真剣に考えたいと思うのですが、分からないことがいっぱいです。

規制緩和による“参入”が、いわゆるクリームスキミング(美味しいとこ取り)だと言われます。郊外の“不採算路線”は、離して給与水準の低い民営にというのは、何と言ったらよいのでしょう。都市の公共交通は、赤字路線を黒字路線の収益で支援する「内部補助」をしています。これは経営の論理なのか、福祉の精神なのか迷います。

都市から離れた中山間地域は、環境を守り、食糧や自然資源の生産によって、都市生活を支えています。利便を享受している都市市民は、その生産と生活の支援に、無関心でよいのでしょうか。

大都市の周辺で、いわゆるスプロール開発が進みました。水道・エネルギーなど、他の公共サービスとともに、バスもサービス提供しました。いまそこでは高齢化が進み、不採算路線になっています。

同じ“生活支援路線”でも、農山村地域とは意味が違うのではないか。いわゆる“自己責任”論が言われましたので、考え込んでしまいました。

都市計画・地域づくりにも責任があります。住民の生活行動や公共サービスのコストまで考えて土地利用計画を考えていたでしょうか。発

達成長学や社会心理学の成果にも学ぶべきでしょう。

都市の公共交通事業はすごい経営資源を持っています。とりわけ、公営事業は公務員が担っています。服務の根本基準は「全体の奉仕者」です。みんなのために、リードして頂くよう、願う次第です。

京都造形芸術大学とマサチューセッツ工科大学合同の姉小路ワークショップの取組報告

〔京都事務所／石本　幸良〕

今年もマサチューセッツ工科大学(以下MIT)と京都造形芸術大学の大学院生による、姉小路界隈をフィールドとしたワークショップが開催されました。MITの神田駿教授が京都造形芸大に知人がいることから、昨年に続いての合同調査となりました。昨年は姉小路界隈で1週間の取組後、城崎、金沢でワークショップを展開し、盛り沢山のスケジュールでしたが、今年は姉小路だけにしぼって約10日間のワークショップでした。

昨年は公共空間側から町家街区へのまちづくり提案をテーマに取り組みましたが、今年は歴史的な町家街区の具体的な再生手法の提案をテーマとしました。

参加者はMIT 7人と京都造形芸大の11人の大学院生。6月3日に都心部の老舗旅館や町家の見学とヒアリングを行い、4日には姉小路界隈を考える会のメンバーと私が京都のまちの歴史と都心界隈の都市構造およびまちなか住まいについて説明を行いました。以後は5グループに分かれ、京都造形芸大の研究室を起点に、独自のまち歩きと調査を行い、グループごとの作品をまとめ、12日の午後からプレゼンテーションと関係者による合評会を開催しました。今年もかなりハードなスケジュールでしたが、全グループとも、詳細な模型とCG等を駆使した提案がまとめられました。

各グループの作品とも京都の町家街区の空間構成を短期間にとらえ、テーマ設定のもとに、かなり大胆な町家街区再生の提案でした。しかし、現代のまちの再生提案から、100年後の提案まで幅があること、クリアランス的な方法から、ゆっくりと取り組む修復型の提案と差があり、相互評価はできませんが、模型や図面等の驚くほど精度の高い作品に接して、今年も改めてその技術力と知識の豊富さには感動しました。

今回の参加のMITの大学院生のプロフィールを見るとその履歴は日本の大学との大きな違いを感じ取ることができます。年齢は書かれていませんが、ほぼ30才前後と思われます。全員が世界の大学を卒業後、画家を目指したり、アメリカやヨーロッパの設計事務所での実践経験を経て、その知識と経験をベースとしてMIT建築学科の大学院に学んでいます。その中でイェレナ　ペーコビッチはセルビア出身で、市民戦争の中、1997年に国際赤十字主催でノルウェイのカレッジへの入学の幸運に恵まれ、その後アメリカに渡り、ハーバード大学に入学、大学院はMITで建築を学んでいるとの経歴です。末尾には故郷セルビアにもどって建築家として活躍したいと結んでいます。

姉小路界隈を考える会も活動開始して10年目を迎え、国内外の多くの大学生の研究対象として注目されています。MITの交流は来年以降も続きそうです。私たちの会の活動がまちづくりや建築を学ぶ学生にとって的確なフィールドとしての役割を担い、その交流を通じてまちをPRするとともに、まちの人にとっての誇りとまちへの再考につながればと期待しています。7月末には上海の大学との交流も実施しています。京都から市民のまちづくり活動の実践情報を今後も提供し続けたいと考えています。

参加したMITの学生の作品発表

「リターナブルびん」の利用促進について

〔大阪事務所／松岡　浩史〕

暑い日の違和感

電車を降りて、辺りを見回す。駅前のビルに設置された温度計は34度を示している。・・・暑い。のどが渇いた。私は自動販売機の前で動けなくなっていた。

「しゃーないなー」などと独り言を言いながら、コインを投入する。

「何がいいかな・・・ん？」

どれにしようか迷っている時、妙な違和感を覚えた。

“ガチャン”

お茶を飲みながら、さっきの違和感はなんやろうと考えたが、原因は分からない。いかん、いかん、打合せに遅れてまうわ。

リターナブルびんとは

あわてて会議室に入り、汗をぬぐいながら着席した。

「今日の打合せは、リターナブルびんの回収システムについてですが・・・」

みなさんはリターナブルびんをご存じだろうか。そう、一升びんやビールびんなどのことである。これらのびんは、酒屋などで回収され、きれいに洗って再使用されており、一升びんは6～7回、ビールびんは平均20回以上も再使用されている。ある報告書※によると、リターナブルびんを繰り返し使用することによって、地球温暖化の原因の1つとされている二酸化炭素の発生量を再使用できないびんを使用したときの約1／4に削減することができると推計されている。

そのため、多くの自治体がリターナブルびんの利用を推進しているのである。

京都市の場合

京都市でもリターナブルびんの利用促進を目指して、今年の6月から新しいびんの拠点回収システムを導入している。これは京都市と京都硝子壜(びん)問屋協同組合が実施している事業で、スーパーや公設市場などに設置したびん回収ボックスでリターナブルびんを回収し、再使用していくというものである。現在は市内8店舗での回収にとどまっているが、今後、段階的に回収ボックス設置店舗を増やしていく予定である。

違和感の原因

「・・・では、よろしくお願いします。」

打合せを終えて帰る道すがら、そういえば、私が子供の頃は、河原で炭酸飲料のびんを見つけると喜んで酒屋に持って行ったなあ。と思っていた。（炭酸飲料の1リットルびんを酒屋に持って行くと、びん代として30円がもらえた。）

駅前の温度計は36度を示しており、さらに暑くなっている。

しばらく忘れていたのどの渇きが蘇ってきて、自動販売機の飲料サンプルがいくつも目に飛び込んでくる。

「もう一本買うかな。」

行きと同じ自動販売機にコインを入れようとして、ハッと我に返った。

「あっ！・・・そういうことか。」

よく見ると、その自動販売機で売られている飲料は全てペットボトル入りであった。

私はのどの渇きをこらえ、自動販売機に背を向けて事務所まで早歩きで帰った。

公設市場に設置された回収ボックス

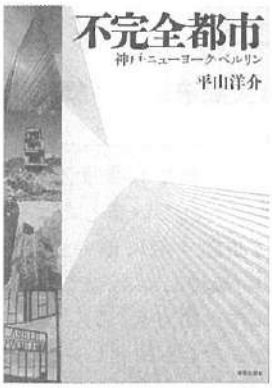
※ＬＣＡ手法による容器間比較報告書<改訂版>（容器間比較研究会）

三輪泰司会長の都市計画学会功績賞授賞の祝賀会を開催します

先月号でご報告いたしました弊社三輪会長の都市計画学会功績賞授賞について、お祝いのお言葉をいただき有り難うございました。弊社は、授賞を慶ぶとともに、これからの都市政策・まちづくりへの礎として活かすべきと考え、アルパックＯＢ会との共催でささやかながら祝賀会を催します（詳細については企画推進部：馬場、中村にお問い合わせ下さい）。

日時：10月24日(日)　午後1時から5時

場所：ぱるるプラザ京都（ＪＲ京都駅北）



「不完全都市」

○著者　平山洋介（神戸大学発達科学部教授）

○発行　学芸出版社

紹介者／大阪事務所　馬詰　建

本書は、「都市の再生」に関する本であるが、いわゆる「都市再生」の本ではない。「不完全都市」とは、都市はそもそも不完全であり、また時には破壊・崩壊を経験し、そこからの再生を模索する。

本書では、不完全都市、その破壊／再生の検証の対象として、神戸、ニューヨーク、ベルリンを取り上げている。

「神戸」においては、都市計画決定の過程、震災時の“合意形成”の持つ意味について、論じた後、震災後に露呈した市街地空間の変質（地蔵などの移動、消滅）、復興の過程とファンタジー化された住宅展示場などとの対比などが論じられている。また、復興の過程は、バブルの崩壊とともに住宅所有の不安の時代へと続いていく。神戸の模索はルミナリエという一大ファンタジーへと展開する。それは希望なのか、幻影なのか・・・

「ニューヨーク」は、アフォーダブル住宅の危機を迎えていた。これについては、前著書「コミュニティベースト・ハウジング」に詳しいが、グラウンド・ゼロを迎え、世界のそしてニューヨークの象徴的建築物であるＷＴＣ（ワールドトレードセンター）を失った。筆者は、ニューヨークの再生を公共空間としての都市の再興として捉えられるとし、ツインタワーとは何であったのか、ランドマークが消滅した場所から何を構想すべきなのかという問題が議論を呼び起こしていると指摘する。

「ベルリン」では、都市空間の20世紀とは何であったのかが凝縮されているとする。西ドイツの戦災復興、そして東西ドイツの統一にともなう、東西ベルリンの特殊性に触れる。東ドイツ地域において、唯一西ドイツ領地として細長い線によって支えられてきた西ベルリンと東ベルリンの統合、そして統合後のベルリンでは、ポツダム広場の再開発、ソニーセンター、ダイムラーシティに代表される建設ラッシュ、都市空間の変容・激変が論じられている。ベルリンは「欧州最大の建設現場」と化し、統合と分裂は「競合の空間」を生み出したとしている。

また、両ドイツの歴史とともに社会・政治的な摩擦の力学が都市形成に及ぼした影響について論じている。

３つの都市が論じられているわけだが、やはり私にとっては「神戸」が気になった。当時、被災し、復興していく神戸を見ながら、また、業務でも関わりながら、漠然と疑問に感じていたことがまさに指摘、論じられている。その他の都市においても、破壊は一つのきっかけであり、その再生の過程では別の時代性や力学を内包しながら、新たな都市がつくられていくのだと感じた。

まちかど

交野発、酒蔵を活用したコミュニティビジネス

〔大阪事務所／絹原　一寛〕

大阪府交野市に大門酒造という酒蔵があります。蔵元が古い酒蔵を活用して、酒販以外にも様々なイベントを仕掛けており、最近新聞等にも取り上げられるなど注目されています(ホームページ http://www.sakahan.com/ にも詳しい情報が記載されています)。この度は、JAYE&jaye's MASS CHOIR という、ゴスペルを日本語でアレンジした曲を歌うプロのミュージシャンを招くということで、知人からお誘いを受けて行ってきました。

駅を降りて、旧集落の面影が残る路地を歩いて酒蔵に到着。非常に分かりにくい道のりだったのですが、既にお客さんが多数訪れており、ライブ会場の席はいっぱいになりました。そしてライブのスタート。ポップな雰囲気を織り交ぜながら、ソウルフルな歌声を披露し、約1時間半のステージを終えました。

ライブの後には、酒蔵で造っている日本酒を飲みながら語らう「吟醸酒と旬の肴で交流を楽しむ会」が待っていました。こちらで造られているお酒が先日の品評会で金賞を受賞されたということで、日本酒は大人気。思わずライブがあったことも忘れてしまうほど(!?)、皆おいしい酒に酔いしれていました。

かつては閉鎖寸前に追い込まれた時期があり、ファンの後押しがあって復活したとか。地元で生まれ育った方も「こんなところがあるとは知らなかった」とおっしゃってましたが、遠方からのお客さんが多く、イベントもいつも満席になるほど人気が高いそうです。蔵元の大門氏はじめ、酒蔵のスタッフが美味しいお酒とサービスで「おもてなし」し、そのお客が口コミで良い噂を広め、またお客を呼び、お金を落とす(イベントに参加してお酒を買って帰る)という好循環ができています。

いわゆる小布施町といった観光地でこうしたビジネスを興している話はよく聞きますが、交野市というロケーションでも、きめ細やかなサービスを提供してお客さんに満足してもらうビジネスの発想を取り入れ、成功している好例ではないでしょうか。何より、当日の語り口の巧さも含めた蔵元の営業センスには脱帽、といった感じでした。

母屋

日本酒でおもてなしする大門氏

アルパック (株)地域計画建築研究所

本　　社　URL:http://www.arpak.co.jp　E-mail:info@arpak.co.jp
京都事務所　〒600-8007京都市下京区四条通り高倉西入ル立売西町82/TEL(075)221-5132 FAX(075)256-1764
大阪事務所　〒540-0001大阪市中央区城見1-4-70・住友生命OBPプラザビル15F/TEL(06)6942-5732 FAX(06)6941-7478
名古屋事務所　〒460-0003名古屋市中区錦1-19-24・名古屋第一ビル8F/TEL(052)202-1411 FAX(052)220-3760
東京事務所　〒186-0001東京都国立市北1-1-17・田畑ビル3F/TEL(042)501-2531 FAX(042)501-3024　分室/TEL(03)3226-9130
九州事務所　(株)よかネット 〒810-0802福岡市博多区中洲中島町3-8・福岡パールビル8F/TEL(092)283-2121 FAX(092)283-2128